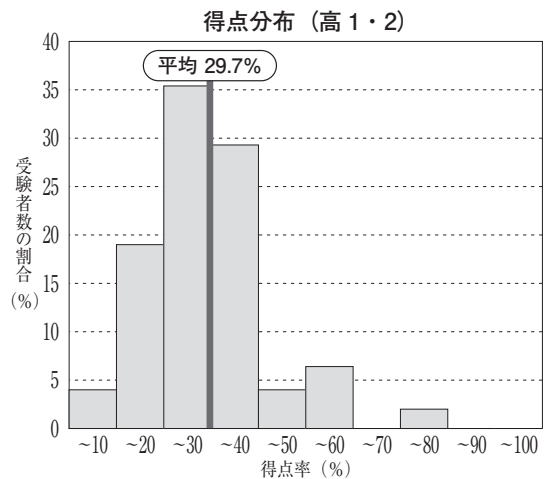
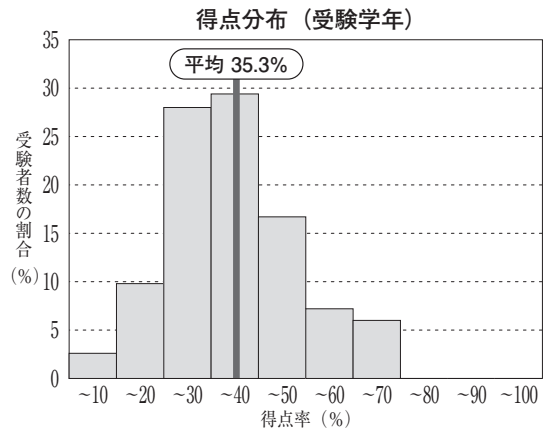


地 学

論理の展開を把握しよう。

I. 全体講評

今回の得点分布は、次のようになっている。受験学年の平均点は 35.3 点であった。これまでに「地学」の全範囲の学習を一通り終えている受験者は、どの分野に、また、どのような出題形式に弱点があるのかをしっかりと分析してこれからの学習に臨んでほしい。ただし、学習済みの範囲でしっかりと得点できていたかどうかを確認してほしい。なお、「地学」は「地学基礎」に比べて学習項目が多いが、教科書をしっかりと理解することで高得点を狙える科目である。着実に得点を伸ばしていくようにしよう。



II. 大問別分析

■各学年の平均点, 大問ごとの得点率

学年	平均点	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問	第6問
高1	28.4点	26.1%	30.4%	28.6%	32.4%	28.1%	0.0%
高2	30.9点	31.0%	38.6%	27.5%	28.0%	29.8%	43.8%
受験学年	35.3点	33.1%	44.0%	31.9%	34.6%	35.5%	42.3%
全員	33.3点	31.5%	40.7%	30.4%	32.7%	33.3%	38.2%

第1問 固体地球の活動

知識を論理的に捉えよう。

Aでは島弧-海溝系の地震, 火山, 地質についての総合的理解を確認した。解説の断面図はとても重要である。マグマが発生する深さや変成岩が形成

される場所などを確認しておこう。

Bではプルームについての基礎的理解を確認した。超大陸の分裂とスーパープルームとの関係についても確認しておこう。

Cでは地球内部の温度分布と熱源についての基礎

的理解を確認した。解説を参考に、地球内部の温度分布のほか、地震波速度分布や密度分布も確認しておこう。

第2問 地質と岩石

断面図を描いて考察しよう。

地質図から地質構造を読み取る力と地層に関する総合的理解を確認した。本問のような問題では、自分で断面図を描いて考えなければならない。解説を参照して、走向に垂直な方向の断面図を描けるように練習を繰り返そう。また、本問では化石は出てこないが、地層の対比には示準化石が頻出である。各時代の示準化石も確認しておこう。

第3問 大気と海洋

暗記ではなく、関係を理解しよう。

Aでは梅雨期の気圧配置と気象についての基礎的理解を確認した。日本の気象に関しては、冬や夏の季節が題材になることが多いが、本問で梅雨期の気象についても整理しておこう。

Bでは大気の安定・不安定の原理についての基礎的知識を確認した。解説のグラフを参照し、乾燥断熱減率および湿潤断熱減率と絶対安定・条件付き不安定・絶対不安定の関係を正しく理解しておこう。

第4問 宇宙

各法則を正しく扱えるようにしよう。

Aでは地球の自転・公転と太陽日・太陽年についての基礎的理解を確認した。恒星日や太陽日など、いろいろな用語が出てくるが、問題文に説明が書いてあるので、慌てずに問題文をよく読もう。またそれぞれの数値が何をあらわしているのか、図を書いて説明できるようにしておきたい。

Bでは恒星の質量の求め方と大きさの比較についての基礎的理解および計算力を確認した。シュテファン・ボルツマンの法則やケプラーの法則、万有引力の法則などの使い方を練習しておこう。

第5問 地球の歴史

生物の進化と年代を合わせて把握しよう。

Aでは地球史における生物の大量絶滅についての基礎的理解を確認した。大量絶滅の原因と証拠のほか、各時代の生物の変遷についてもまとめておこう。

Bでは大気の進化と地球環境の関係についての理解を確認した。解説の表で、先カンブリア時代の地球環境の変遷を確認しておこう。

第6問 銀河と宇宙

知識を整理し応用しよう。

ハッブルの法則についての総合的理解を確認した。解説を参照して、恒星や銀河の距離の求め方をまとめておこう。また、銀河の後退速度の求め方を確認しておこう。

なお、第5・6問は選択問題になっている。両問題をざっと見比べた上で、学習の進捗状況などに合わせて取り組みやすい方を選択すればよい。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆受験生及び既に受験勉強に励んでいる人へ

◆(1) 時間に負荷を掛けて演習しよう。

入試本番では、必ず見直す時間を確保したい。例えば、センター試験では試験時間60分のうち、10分程度を見直しに充てられれば理想的である。そのためには普段から大問ごとに制限時間よりも短い時間を設定し、負荷をかけた演習を行うことが有効である。過去問の演習の際には大問ごとに時間を設定して取り組むことが重要である。

◆(2) これからの学習について。

センター試験本番では「地学」を選択する受験生には是非とも高得点を狙ってもらいたい。そのために欠かせないことは、苦手分野や学習漏れをなくすることである。ただし、「地学」は教科書の内容も多く、「地学基礎」に比べると全範囲の学習に時間がかかる。センター試験では、過去のグラフや図などに類似した問題が何度も出題されてきた。「地学」となっても、同様の傾向が予想される。模試とあわせて過去問を活用し、演習量を効率よく確保できるようにしよう。

◆これから本格的な受験勉強に取り組む人へ

◆センター試験の地学について。

センター試験の「地学」は新しい科目のため過去問は少なく、学習を進めるにあたって不安もあるだろう。しかし、センター試験の出題範囲は教科書に限られている。センター試験で高得点を得るために

は、「教科書」→「問題演習」→「教科書」という流れの学習方法を反復し、教科書を徹底理解することが大切である。この反復によって知識を総合化していくことが大切である。そのためにも、はじめは、理解しようとか暗記しようとか考えずに、地学の内容を概観することが大事である。地学は地球物理、プレートテクトニクス、岩石・鉱物、地質・地史、気象、天文、自然環境と範囲が多岐にわたっている。これらについてどんなことを学ぶのか、どのような図表やグラフがあるのか、大体のイメージを最初に作っておくことがその後の学習に役立つ。

◆模試を活用しよう。

「地学」にはセンター試験の過去問が2年分しかなく、演習量が不足しがちである。そのため、模試を演習の一環として学習を進めていくことが重要となる。2か月ごとに実施される東進のセンター試験本番レベル模試は、全国統一高校生テストも含め年6回で「地学」の出題範囲をすべてカバーするため、学習の進み方と学習が不足している分野を判定できるよい機会である。今後も模試の受験を継続し、着実に得点を伸ばしていこう。